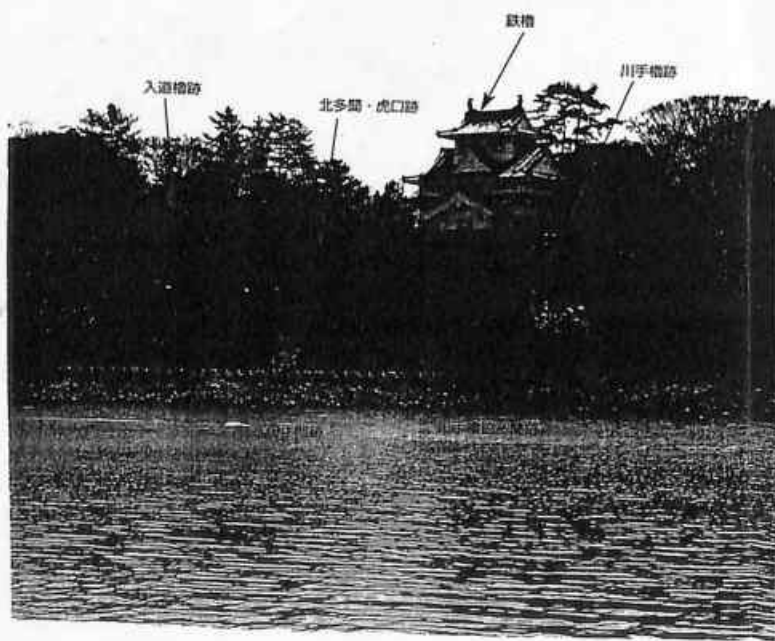


本丸千貫格の跡巻=石垣



空堀跡

← 豊川村岸からの眺望



吉田城 松平大河内家7万石



明治9年名古屋城(古写真)

名古屋開府400年、よみがえる徳川の栄華

今年には江戸時代に名古屋市のまちづくりが始まってちょうど400年。地元では「開府400年」を祝う行事が目白押しだ。自動車産業やプロ野球の中日などのイメージが強く観光の印象が薄い名古屋だが、尾張藩の城下町の伝統を受け継ぐ。節目の年に新たな発見をしてみたいはかだろうか。

まちのシンボル、名古屋城で開府400年を記念して本丸御殿の再建工事が2017年度の完成をめざし進んでいる。御殿は初代藩主・徳川義直の住居と藩の政庁として使われていた。武家風の書院造りで1930年に国宝に指定。ただ45年の空襲で天守閣とともに焼け落ちた。ふすま絵や天井の板絵などは難を免れており、市ではこれらの文化財を精巧に模写したものを御殿にはめ込む計画で、10年度中に玄関の一部が完成し公開の予定だ。

今なら建設工程そのものが見られる。鉄骨造りの屋根が設けられ、体育館ほどの敷地で進む工事を高さ9mの足場から一望できる。柱の組み立てなど「復元の過程から匠(たくみ)の技を見られるいい機会。公開しないのはもったいない」と同市名

古屋城整備室は狙いを語る。工事の手順などを紹介するパネルや音声ガイド装置もある。観光客の評判も上々だ。「名古屋にやって来る新しい楽しみになった」というのは家族4人で東京都から訪れた公務員の男性(36)。さいたま市から来た主婦(60)も「完成が楽しみ。わくわくする」と楽しそうに話した。近くには復元の様子を詳しく解説する見学コーナーもあり、使用する木材や工具類などを展示している。

築城から戦災まで 古文書などで紹介

かつての尾張地方の中心は名古屋市の北西の清須(現清須市)。織田信長も城を構えたが、土地が低く水害や敵の水攻めに遭い

名古屋開府400年

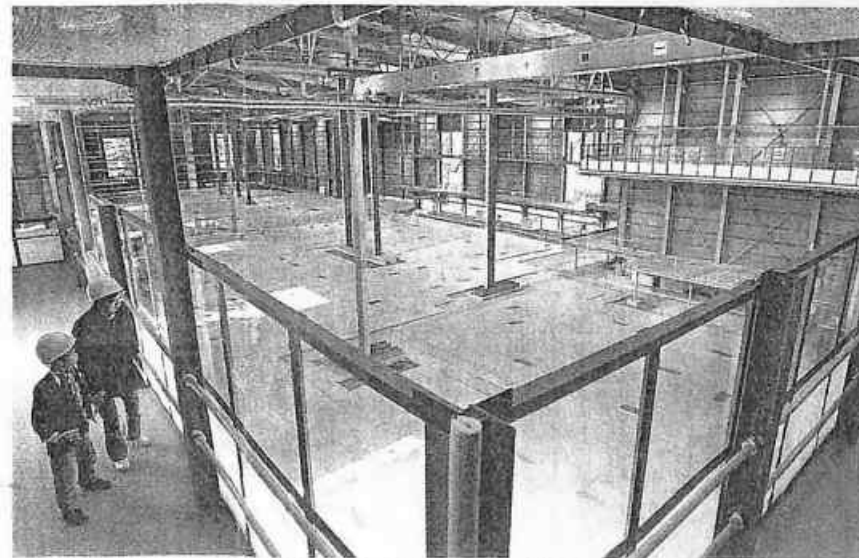
1610年は名古屋城の築城が始まるとともに、尾張の中心が清須から名古屋に移った年でもある。清須は土地が低く、木曾川のはんらんや水攻めなどの恐れがあるため、台地で陸海の交通の便が良い名古屋へ町ぐるみの移転(清須越)が行われた。

2010年は名古屋の町づくりが始まった「開府」から400年にあたるため、さまざまなイベントが行われる。

現場で体感 本丸御殿復元

やすい一面もあった。徳川家康は大坂城の豊臣氏に備えるため尾張に巨大な城郭を造ることを決め、清須の城下町をそのまま現在の名古屋に移転させる「清須越し」を発令。1610年(慶長15年)に名古屋城の築城とまちづくりに着手した。

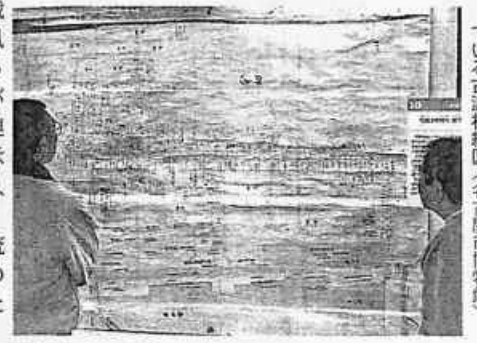
市内の博物館などでも企画展示が相次ぐ。名古屋城から車で15分ほどの名古屋市博物館(瑞穂区)では、江戸時代からの歴史を文化財や古文書、写真など約400点で振り返る「名古屋400年のあゆみ」を3月7日まで開催中だ。築城から幕末の混乱期、明治期の発展、第2次世界



見学通路が設けられている名古屋城本丸御殿の復元工事現場

大戦による戦災、伊勢湾台風など、順を追ってたどることができる。親子連れや夫婦が展示品に熱心に見入っていた。

市中心部を流れる堀川沿いの景色を描いた「堀川図屏風」や、7代藩主・徳川宗春の甲冑(かっちゅう)も豪華で見応えがある。今回の目玉展示の1つである1725年(享保10年)に作成された古渡(ふるわたり)村(現名古屋市)の絵図は、名古屋最古の絵図風の地図とみられる。約2km四方に街道沿いの家の所有者の名前が細かく書かれている。1868年(明治元年)当時のまち並みがわかる古地図の複製は500円で販売。現在の道路もたどれるように工夫してある。新旧を対比しながら散策するのも楽しそう。同市東区から来た男性会社員(59)は「地元を知るいいきっかけになる」と興味深げに見入っていた。



開府400年記念特別展で展示されている古渡村絵図(名古屋市博物館)

生活がしのばれる企画にまた来たい」という。

徳川美術館では4月から、開府400年を記念した特別展示が相次ぐ。幕末の藩主が撮影した名古屋城の写真などを紹介する「大名古屋城展」のほか、自然をめでた歴代藩主の視点などを取り上げる「殿様、ecoを考える」などもある。企画情報部の小池富雄部長は「物を通じて当時の人々の気持ちも伝わってくる。ぜひ県外の人、外国の方にも来てほしい」という。

(名古屋支社 松下太郎)

豪華な文化映す 国宝など155点

尾張徳川家中心に徳川家の1万5000点以上の調度品や装束を収蔵する徳川美術館(東区)も圧巻だ。31日まで企画展示「蓬萊 延命長寿の願いをこめて」を開催。延命長寿への願いを込めた鶴や松などをあしらった調度品や装束など国宝の銅鏡2点を含む全155点を公開中だ。

5回以上来館しているという東京都世田谷区の林成美さん(54)は「江戸と比べても豪華絢爛(けんらん)な文化のあった尾張徳川家らしい展示」と改めて感じ入った様子。愛知県豊橋市から初めて足を運んだという60代の夫婦も「徳川家の力を感じた。季節の行事など当時の



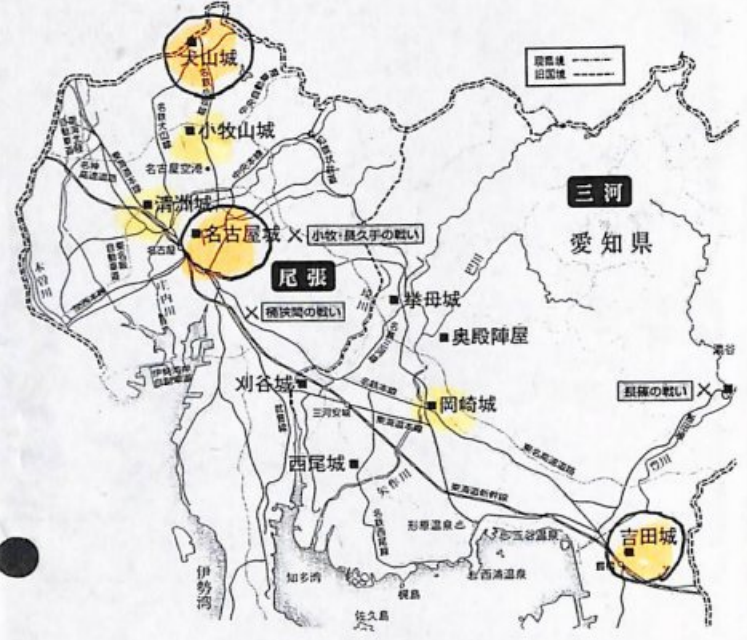
▽交通 電車の場合、地下鉄名城線「市役所」駅から徒歩約5分。車なら、名古屋高速都心環状線「丸の内」出口から北へ約5分
▽営業時間 午前9時～午後4時30分。観覧料は大人500円。本丸御殿の見学は火・木曜を除く午前9時～12時、午後1時～4時
▽電話 052・231・1700

残念ですが本丸御殿は休館日のため見学できません

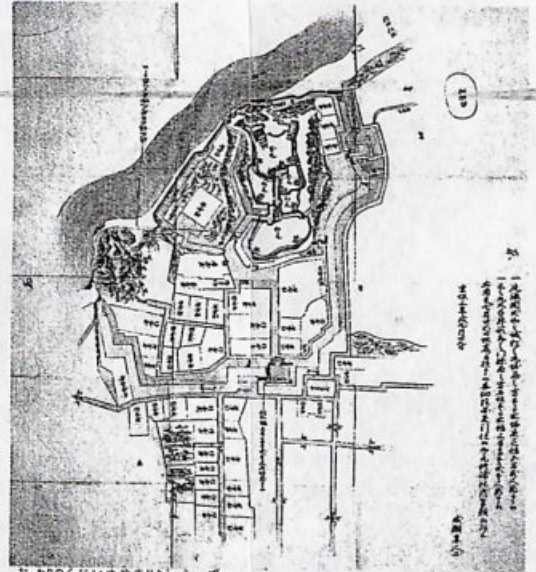
2「城を歩く会」3月定例会

名古屋城、犬山城と近くの城を一泊で訪ねる会資料

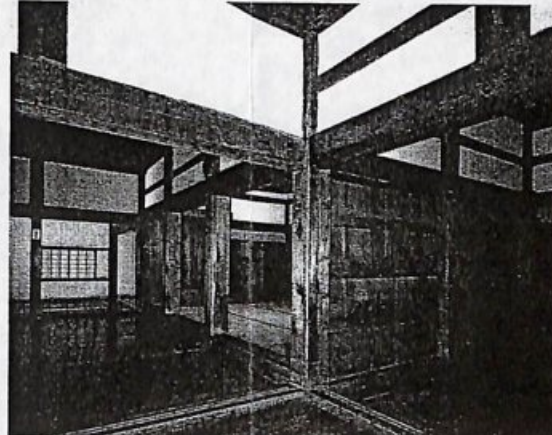
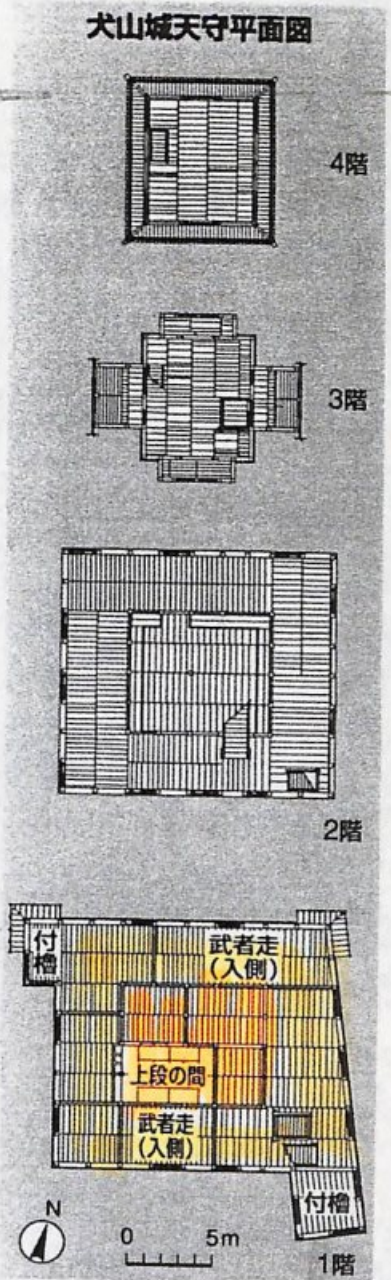
②犬山城と名古屋城を歩く + 吉田城の一部



古式を残した犬山城天守
 現存最古の犬山城天守は、御殿と共通する平面をもっていた。それは古式にのっとり、天守の歴史を考えるうえで興味深いものである。



尾張国犬山城絵図
 天和元年(1681)に作製された絵図。本丸に至る直線的な大手道を両側から挟むように杉ノ丸、桐ノ丸、桜ノ丸、松ノ丸が配置されている。 犬山城白帝文庫蔵 写真 堤 勝雄



天守1階の内部 1階四囲に柱間2間の武者走をめぐらせ、内側の東西5間、南北4間を4室に仕切っている。そのうちの南西隅が上段の間である。

天守平面図 1階は東側だけ大きく歪んだ台形平面だが、2階以上は整形された矩形平面である。1階南東隅と北西隅の付櫓は濃尾大地震で失われた後、復元された。

昨年10月定例会中止、再実施のため資料の一部はすでに作成済みの分を再利用しました

ニッポン 人・脈・記 jinmyaku@asahi.com

お殿様は いま ⑤

犬山城はわが子みたい

愛知県大山市にある国宝の犬山城は、木曾川に面した小高い丘の上に立っている。晴れた日には岐阜城が遠望できる三層の天守閣の最上階に、歴代城主12人の肖像が初代から順に掲げられている。騎馬姿などの肖像が並ぶ中、昨年4月に77歳で亡くなった「最後の城主」成瀬正俊だけは、ウイスキーグラスを手にした写真が飾られている。「酒好きの父が、最も気に入った1枚でしたので」と長女の淳子(44)は話す。成瀬家の先祖が、旧尾張藩の付家老として、この城を手交されたのは江戸時代の初め。明治維新で県の所有となったが、118年前の濃尾地震の際、一部が破損。現存する国内最古の天守閣の修復を願い出て成瀬家に返され、全国でも珍しい個人所有の城となった。



成瀬正俊さんの肖像



成瀬淳子さん、犬山城の天守閣から

「城持つがゆゑの貧しさ虫時雨」正俊が城主になる15年前に作った俳句である。国宝といっても、個人所有のため国からの補助はあまりなかった。正俊の父、東大教授で文芸評論家だった正勝は、修理費や管理費の工面に苦労していた。台風季節になると、いつも天気予報を気にした。城の瓦が風で飛ばぬのは毎年だったが、漆喰の壁が大きくはげ落ちたりすると多額の修理費がかかる。「国宝犬山城、米デイスニーランドへ身売り」。こんな記事がまことしやかに地元紙に載ったのも、正勝の時だ。64年に管理は市に委託するようになったが、城は手放さず、「他の財産は皆なくなっても、城だけはお前に譲る」と言い残し、73年に亡くなった。当時、正俊は東京のテレビ局に勤務していた。城主を引き継いでからは、以前にも増して、犬山城を題材に作句することが多くなった。



稲畑汀子さん

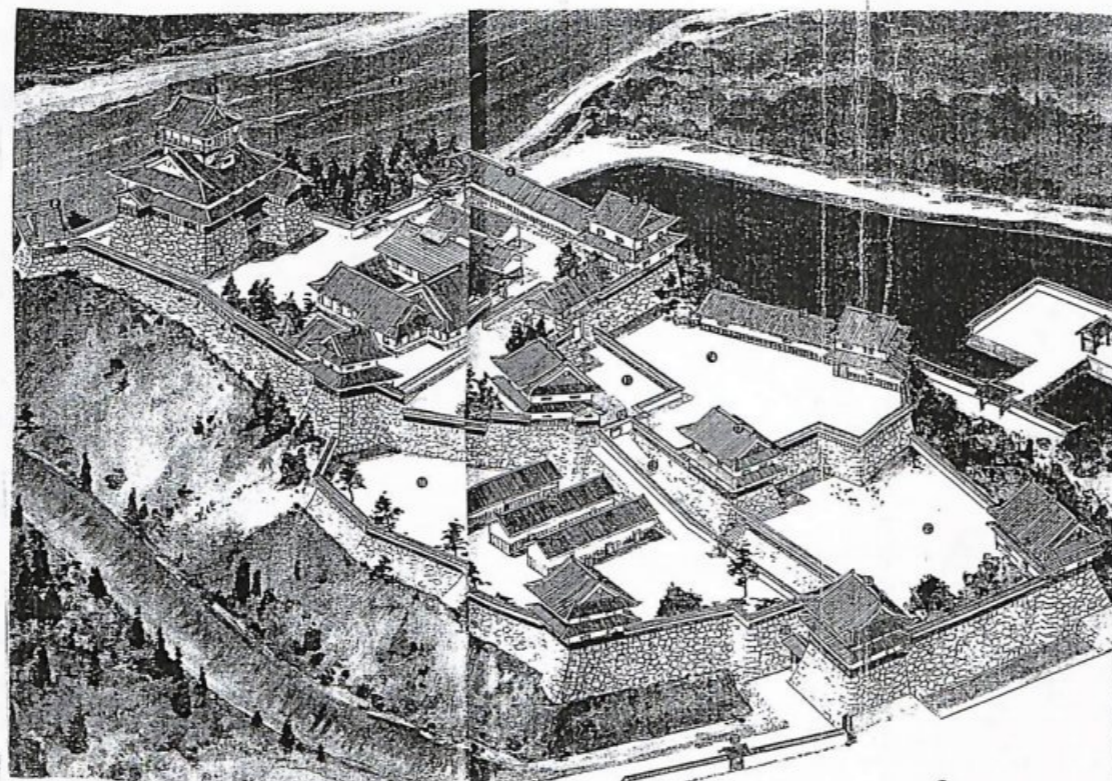
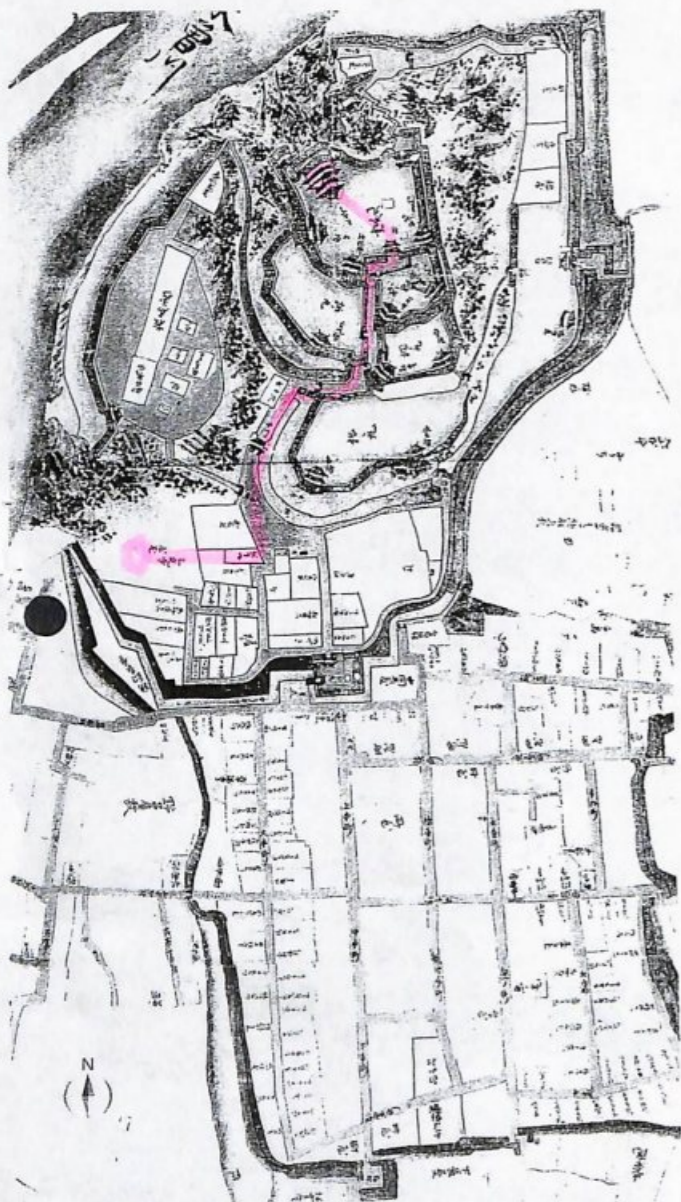
「ひよんの笛吹きて犬山城下かな」この句が大好きだという俳人の稲畑汀子(78)は高浜虚子の孫で、正俊の母である。正俊は7年前から、犬山に住んでいる。毎朝、天守閣を仰ぐと、城の機嫌がすぐ分かる。「真っ青な空が広がっていると、機嫌がいいんです。私が他の仕事で忙しいと、『僕にかまってくよ』って突然、瓦が落ちてきたりする。わがままな子どもみたいなんですから」正俊に、こんな句がある。「犬山城物語いま炎天下」犬山城の、新しい物語が始まっている。(加藤明)

正俊が城主になる15年前に作った俳句である。国宝といっても、個人所有のため国からの補助はあまりなかった。正俊の父、東大教授で文芸評論家だった正勝は、修理費や管理費の工面に苦労していた。台風季節になると、いつも天気予報を気にした。城の瓦が風で飛ばぬのは毎年だったが、漆喰の壁が大きくはげ落ちたりすると多額の修理費がかかる。「国宝犬山城、米デイスニーランドへ身売り」。こんな記事がまことしやかに地元紙に載ったのも、正勝の時だ。64年に管理は市に委託するようになったが、城は手放さず、「他の財産は皆なくなっても、城だけはお前に譲る」と言い残し、73年に亡くなった。当時、正俊は東京のテレビ局に勤務していた。城主を引き継いでからは、以前にも増して、犬山城を題材に作句することが多くなった。

04年4月、財団法人「犬山城白帝文庫」が誕生した。城は成瀬家の手を離れたが、理事長には奔走した淳子が就任した。淳子は7年前から、犬山に住んでいる。毎朝、天守閣を仰ぐと、城の機嫌がすぐ分かる。「真っ青な空が広がっていると、機嫌がいいんです。私が他の仕事で忙しいと、『僕にかまってくよ』って突然、瓦が落ちてきたりする。わがままな子どもみたいなんですから」正俊に、こんな句がある。「犬山城物語いま炎天下」犬山城の、新しい物語が始まっている。(加藤明)

で、正俊が学習院の大学生の頃からの俳句仲間だ。「ひよんの笛とは、イスノキの葉に口を当てて吹く笛のこと。お城の句が多いから、すぐに彼だと分かってしまう。やっぱりお殿様。句に品があって、自分のお城だという愛着の深さが伝わってくるわね」10年以上も前、正俊は運動機能が低下する難病にかかり、東京で入院を繰り返すようになっていた。00年、子どもの中から、淳子を城主代理に指名して、対外交渉に当たらせた。ちょうど、城の入場者が減り、登園料収入がかなり落ち込む事態となり、市が委託管理の抜本的な見直しを求めている。印刷会社などで営業の経験がある淳子は、市の担当者と交渉して、痛感した。「時代はもう、個人所有が限界のところに来ているのでは」成瀬家が所有する秘蔵の合戦屏風や相続税のことを考えれば、財団法人の設立しかないと考えた。以後、犬山城のことを娘の前で口にするのはなかった。

犬山城 尾張付家老成瀬家 3万石



- ①天守
- ②木曾川
- ③本丸御殿
- ④多間櫓
- ⑤大砲櫓
- ⑥本丸鉄門
- ⑦弓矢櫓
- ⑧千貫櫓
- ⑨七曲門(水手口に至る)
- ⑩小銃櫓
- ⑪枳形
- ⑫岩坂門
- ⑬本丸前の階段道
- ⑭杉の丸(二の丸)
- ⑮多間櫓
- ⑯器械櫓
- ⑰御成櫓
- ⑱桜の丸(二の丸)
- ⑲屏風櫓
- ⑳蔵
- ㉑桐の丸(二の丸)
- ㉒宗門櫓
- ㉓道具櫓
- ㉔黒門
- ㉕松の丸(三の丸)
- ㉖松丸門
- ㉗横堀

犬山城

現存最古の国宝天守を持つ「白帝城」

犬山城は天文6年、織田信長の祖父・信康が木曾川左岸、比高40mほどの丘陵に創建、木曾川を背負った文字どおりの「後ろ堅固」の構え、城山に本丸と2の丸、山下に3の丸を置く平山城で、本丸には天守、櫓4基と本丸御殿を配した。2の丸は地形にあわせてさらに杉の丸、縦(もみ)の丸、桐の丸に分け、後期は松の丸に御殿を移した。

城主は元和3年、尾張徳川家付家老成瀬正成が入封、その子孫8代が継承して明治維新に及んだ。

*

バスは旧城内3の丸重臣屋敷跡の観光駐車場に駐車、本丸天守をめざす。途中2の丸大手道(登城路)は1直線に続く。あるいは安土城を模したものだろうか。両脇は石垣で遮断され、守るに易く、攻めるに難い。昇り切ると升形、正面に櫓門形式の本丸鉄(くろがね)門が銃火を浴びせる構造に成っていた。

*

最大のみどころは国宝の天守、方形大天守の右前面に付櫓を配した複合式天守で、穴蔵地下2階の上に2重3階の大入母屋造りを上げ、その上に高欄と廻縁が回る4階が乗っている。安土城天主に始まる典型的な「古式望楼型天守」になっている。

丸岡城と現存12天守の最古を争う。はじめ天文年間説が有力であったが、解体調査の結果、慶長6年新築が確認され、最古の座が揺らいでもいる。

*

「白帝城」の名は、江戸時代の儒学者荻生徂来が眺望の美しさに打たれ、李白(りはく)の漢詩から名付けたとされる。白帝城は中国長江沿いの伝説的名城、「三国志」の英雄劉備(りゅうび)玄徳の没地でもある。

朝辞白帝彩雲間 朝早く朝焼け雲のたなびく白帝城に別れを告げ

千里江陵一日還 千里先の江陵まで1日で行く
兩岸猿声啼不住 兩岸の猿の声が絶え間なく続く内に
輕舟已過万重山 小舟は幾重にも重なる山々を通り過ぎて行った



成瀬正成

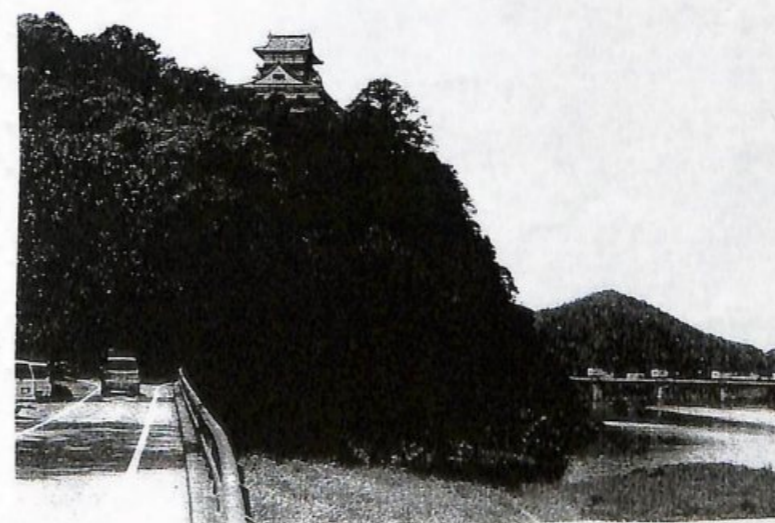
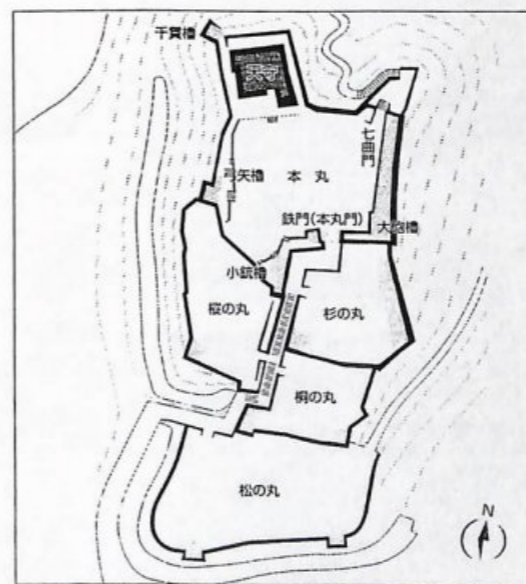


犬山城天守

犬山城主要年表=

- 天文6年1537 織田信康築城
- 天正12年1584 小牧長久手の戦いで落城、秀吉の臣・石川光吉現在地に修築
- 慶長5年1600 光吉、関が原の戦いで西軍に与して改築
清洲松平忠吉付家老小笠原吉次が入封
- ” 6年1601 近世城郭に改修、現存天守を創建
- ” 12年1607 名古屋徳川義直付家老平岩親吉入封
- 元和2年1616 義直付家老成瀬正成入封
- 明治元年1868 成瀬正肥大名に列し、犬山藩となる
- ” 4年1872 廃藩置県
- ” 6年1874 廃城、民間所有になる
- ” 24年1891 濃尾大地震で大破、成瀬家に譲渡
- 平成16年2004 財団法人犬山城白帝文庫所有となる

- 築城年=天文6年
- 築城者=織田信康
- 主要城主=織田氏、小笠原氏、成瀬氏
- 形状=平山城
- 縄張り=連郭式
- 遺構=天守(国宝)、石垣、空堀
- 天守の構造=望楼型初期天守、3重4階地下2階
- 木造、現存天守12城の1つ
- 別称=白帝城
- 城下=総構え



木曾川を臨む要害、景勝に築かれた名城

現存最古の国宝天守・犬山城

1) 木曾川に守られた天然の要害 —— 対岸を迂回して旧3の丸の観光駐車場へ

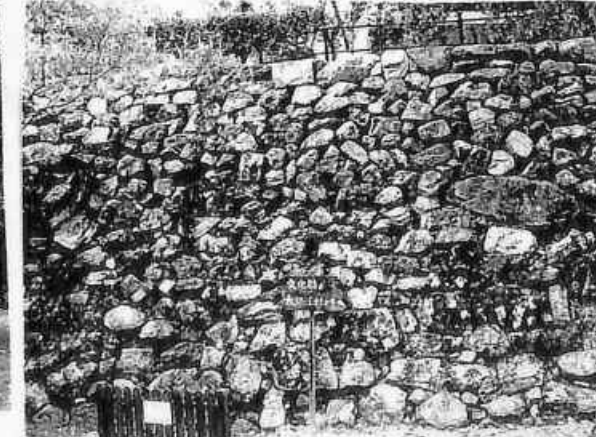
- ①迂回して木曾川越しに犬山城を遠望、背後は絶壁、「後ろ堅固の城」を実感。
城直下の川べりと対岸からの景観は犬山城の象徴、紹介写真の定番として知られる。
- ②別名を「白帝城」という。中国の名城に思いを馳せる。
- ③ライン大橋を渡って城内へ。市の観光駐車場で降車。
- ④駐車場は旧3の丸重臣邸が立ち並んだ一画、城山は北側、東南の山下側100mほどに内堀（空堀）、大手門、越えたと総構え城下で外堀が巡った。

2) 大手道は1直線に石段を登る —— 3段に分かれた2の丸

- ①最初に「国宝犬山城」を記す巨石、ここから登城路がはじまる。
- ②堀切、橋、中御門跡=登城道のはじめの門を中御門といい、近くに番所もあった
(1)何と不適切な文章、門名は大手門と本丸まん中門の意味。絵図は堀切と橋、櫓門を描く
- ③矢来門、松の丸門と短い間隔で門が続く。
(1)矢来は竹や木を荒く組んだ垣をいう。柵のような簡単な門であろうか
(2)3の丸・松の丸門（城主御殿正門）=江戸後期、本丸御殿を老朽取り壊し（焼失？）た時、登り坂を嫌って3の丸に松の丸御殿を建てて移転。現在、針綱神社で面影はない。
- ④左西側の斜面は防御のための空堀、右側は松の丸の石垣が続いた。
- ⑤松の丸門から黒門までは屈曲させた升形。右は道具櫓台、戦時は防衛拠点になる。
- ⑥黒門からは2の丸で、石垣に囲まれた直線の階段道になっている。2の丸は通常1郭だが、ここは右側が杉の丸（上）と桐の丸（下）の2段、左側は縦の丸の3郭からなった。
(1)杉の丸に御成り櫓、器械櫓、桐の丸に道具櫓と宗門櫓、縦の丸に屏風櫓があった
- ⑦入城チケット売り場先に岩板門。広場は本丸大手「升形」。
- ⑧升形正面に本丸鉄（くろがね）門=櫓門（渡櫓？）。昭和40年再建の復興門、当時は史実にこだわらない城作りが普通だった。
- ⑨小銃櫓台=この櫓も模擬復興。堅固な本丸の守りに注目しよう。
(1)小銃櫓台周辺石垣は典型的な野づら積み。後出天守台石垣より古い石組みで、室町末期構築といえる



↑3の丸跡の駐車場 ↓大手道 ↑入口の標石 ↓本丸鉄門 ↑空堀 ↓本丸石垣



3) 典型的「望楼型天守」が眼前に飛び込む —— 現存最古?の国宝天守

- ①まずは記念写真から。思わず壮麗な天守外観を見とれる。
- ②初期望楼型天守（明日の名古屋城は層塔型天守=五重の塔のように低減率にこだわる）ははじめに大入母屋造りの2重天守（内部は3階）を作り、屋根に望楼を乗せる。
(1)当初は室町時代末期の創建とされたが、のち室町末期は2重2階の入母屋部分だけで、慶長時代に3、4階を上げたと変わり、現在は慶長6年建造とする。
- ③望楼部（3重、4階部分）=屋根入母屋造り、本瓦葺き、しゃち。壁面白漆喰、真壁、開口部外両開き戸、花頭窓明かり取り、廻り縁、高欄。
- ④唐破風部分（元和6年改修時に増築=2重と3重の間、3階部分）=白漆喰、武者格子窓、突き上げ窓
- ⑤大入母屋屋根（2重、2階部分）=本瓦葺き、壁面白漆喰、大壁。半間戸?、武者窓?
- ⑥初重（1重、1階部分）=壁面上部塗り込め白漆喰大壁、下部下見板張り、黒塗装（柿渋、漆?）、外両開き窓、武者窓
- ⑦付櫓=天守入り口への横矢を意識
- ⑧西側1階の出張りと石落とし

4) 七曲門跡から急崖の木曾川を臨む —— 本丸御殿跡と本丸石垣

- ①天守が目の前だがはじめに本丸の城史跡にも目を広げる。
- ②本丸御殿跡=本格的な書院造り殿舎がいっぱいに広がった。
玄関、表向き（官庁舎）、中奥（城主居所）、奥向き（家族居所）
- ③弓矢櫓（2重櫓）=武器倉庫。戦時は弓鉄砲射場と変わる。
- ④はちまき石垣
- ⑤七曲がり門跡=急斜面を少し降りて水の手御門（井戸郭）に通じた。
- ⑦大杉様=築城期からの老木で避雷針の役割も果たしたこともあったという。



↑国宝天守 ↓大杉 ↓本丸急がけ石垣 ↑天守1階の下見板 ↑天守石垣



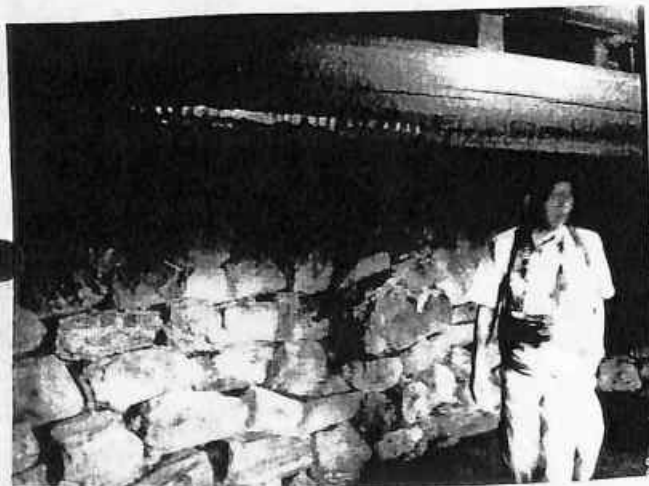
七曲の内跡

- 5) 荒々しく力づよい野づら積み天守台 — 赤石は木曾川の地元石をあら割りした
- ①赤い石=係員によるとチャート石? 地元の石材で木曾川川原や上流部に点在しているという。固いがもろそう。加工がしにくそうにもみえる。
 - ②自然石またはあら割り石を積み上げた野づら積み(あら割り積み)。初期石組みから打ち込みハギへの進化過程といえる。
 - (1)心外だが穴太積みと大くみされることも多い
 - ③コーナー部はやや角ばった大石を前後交互に積み上げるが算木組ではない。
 - ④勾配ソリはない。直角。

6) 現存最古の物証上段の間、実は幕末の装飾だった — 見どころたっぷりの天守

- ①天守内部へ。履物をビニール袋に入れて移動。片手通行、急階段に注意しよう。
- ②玄関=
- ③穴蔵1階、穴蔵中段=巨大な梁材、石垣のはらみ崩壊を防止する控え柱
チョウナやヤリかなな仕上げに注目、階段踊り場
- ④1階武者走り=ひろびろ2間板張り、天井はない、壁面は真壁の白しゅくと板戸
- ⑤1階上段の間=床の間、袋、違い棚、武者隠しの間。畳敷、天井
- (1)織豊時代天守の城主居住か、有事の居所か、国宝指定の根拠になったが、その後の調査で幕末に作られた装飾と判明、天守の建造年代慶長6年が確定した
- (2)犬山城天守の年代後退で、天正4年建造の丸岡城が現存最古となった
- ⑥1階出張りと石落としの間、付櫓の間
- ⑦2階
- ⑧3階唐破風の間=明かり取りの突き上げ窓
- ⑨4階望楼=廻縁、高欄。狭いが回れる。木曾川や遠く名古屋市街などを遠望。

犬山城をあとに宿泊地の名古屋駅前をめざす



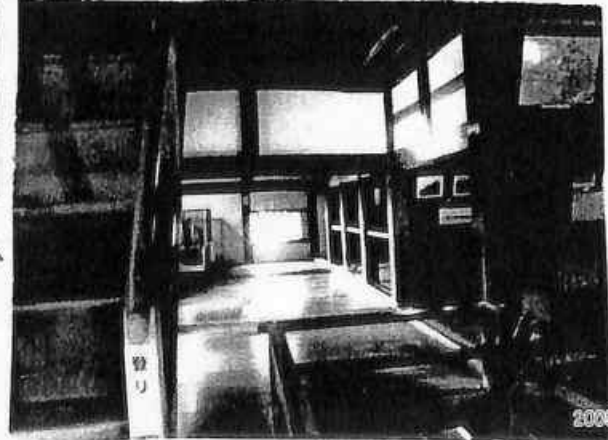
穴蔵
↓1階上段の間



天主から木曾川を望む



↑唐はふの間



武者走りと階段踊り場



成瀬家九代正肥像 (犬山城白帝文庫蔵) 成瀬家は九代目の正肥の代で、やっと大名になることができた。

よかると
日本が城、かす

■尾張藩の実力者である成瀬家
成瀬家は尾張徳川家の筆頭家老として犬山城を居城としていた。その初代・正成は徳川家康の近臣だった。家康の第九男・徳川義直の傅役とされた正成は、義直が尾張に入封するとき、竹腰正信とともに「御付家老」として尾張へ従った。家康から刀を授けられ、義直に不埒なふるまいがあれば切り捨てても許す、と言いつけられたとも伝えられ、尾張徳川家での彼の権力は絶大だった。

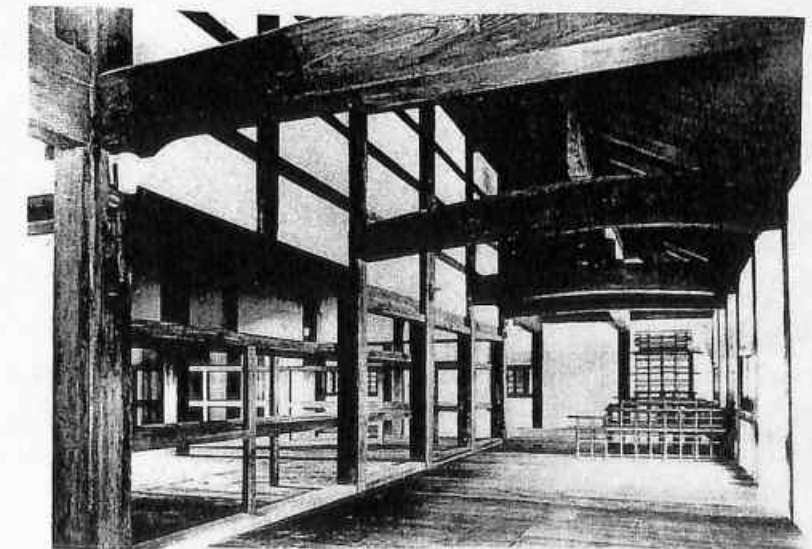
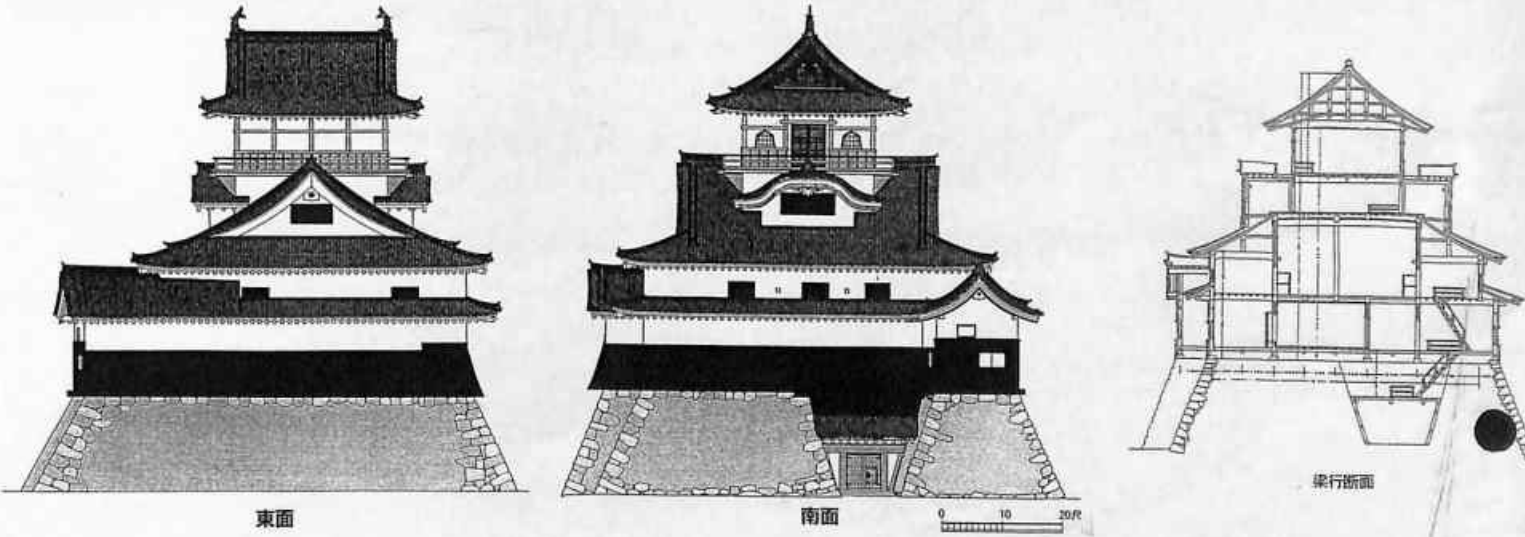
その権力を背景に、正成は尾張藩の政治を取り仕切って藩政を確立させたのだが、それだけの権力を持ちながら、幕府からみれば成瀬家はただの「陪臣」(家臣の家臣)となる。正成の石高は三万四〇〇〇石、というから一万石の小大名な

九代かけて
藩主の夢かなう

どよりも上なのだが、藩主の目付、という「建前」の誇りと、陪臣、という「本音」の屈辱との葛藤が、代々の当主には続いたらしい。

■悲願かなう
なんとか大名に列して「陪臣」の位置から抜け出したい、という成瀬家の思いは徐々に膨らんでいく。幕末には尊皇攘夷を標榜して暗躍、紀州徳川家の付家老・安藤家や水野家、同僚の竹腰家などとともに独立運動を展開した成瀬家は、慶応四年(一八六八)に明治新政府に許されてようやく諸侯に列し、「犬山藩」に格上げしてもらった。「本音」の実現がかなったのだ。しかし、明治四年(一八七二)には廃藩置県が行われ、「犬山藩」は「アツ」という間に歴史の波にさらわれてなくなってしまう。「建前」と「本音」の葛藤のことなど、全くなかったかのように。

(文・橋場日月)



「国宝犬山城天守修理工事報告書」から

国宝
犬山城
別名白帝城



家康が築いた金しゃちの名城＝名古屋城

- 1) 正門は江戸城から移築した榎多御門 —— 西の丸からスタート
- ①正門前の大駐車場で降車。駐車場は元城内、3の丸東照宮跡。元和5年(1619)初代義直が偉大な父家康の「東照大権現」を祀った。
 - (1)江戸城内紅葉山東照宮をしのぐ豪華さであった。明治維新後移動、昭和戦災で焼失した
 - ②正門から団体入城、升形と渡櫓門が出迎える。
 - (1)お城(2の丸)への登城路はこの門と2の丸西鉄門(大手)、東門の3門
 - ③榎多御門(西の丸大手門)＝明治43年、旧江戸城2の丸蓮池御門を移築したが、昭和20年焼失、32年に再建された。
 - (1)現在唯一の渡櫓門、ほかの渡櫓門は再建されていない
 - ④西の丸は城主の隠居御殿として計画されたと考えられるが江戸後期は蔵地になっていた。
 - ⑤名古屋城の榼(かや)の木＝名古屋城の歴史刻む巨木。
 - ⑥目の前、本丸堀越しに天守閣(大森会長担当)
 - ⑦記念写真＝本丸西南隅櫓、天守をバックに撮影

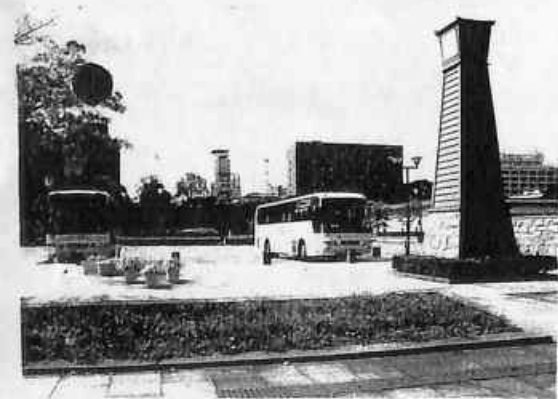
- 2) 天守と隅櫓が並ぶ記念写真の定番 —— 昭和戦災を免れた本丸南西隅櫓
- ①本丸空堀＝平底(箱型)、近世の城は箱型が多い。当初、水濠の可能性もある。
 - ②石垣＝慶長期の先端石積み技術。打ち込みハギ、わずかにソリ、算木組
藤堂高虎縄張りらしい横矢のない直線の墨線に注目。
 - (1)丁場図＝隅櫓から天守側＝鍋島信濃守(勝茂)、大手側＝□□越中守
 - (2)直線石垣は強度が弱い、このころ石垣技術の向上で可能に。高虎の天下普請に多用
 - ③石垣上に白漆喰の土塀が巡った。
 - ④本丸南西隅櫓(通称末申櫓)＝本丸の4隅にはかつて天守と3基の隅櫓があった。
2重3階、濃尾地震で石垣とともに崩壊したが復旧、堀側に破風3こ、大型で華麗。
内部は武器庫、2重白漆喰に源氏棟梁に許される2引き両幕紋がみられる。
 - (1)慶長17年建造、屋根入母屋造り、本瓦葺き、しゃち、平側軒唐破風。
1重平妻とも千鳥破風、出窓(石落とし)。白漆喰塗り込め大壁。武者窓、半間戸。
内部は1、2階とも中央に武者溜まり?、周りを入側が囲む

御三家・尾張徳川家61万石居城

- 3) 日本代表する壮大華麗な書院建築だった —— 2の丸御殿跡、庭園
- ①本丸大手門(表2の門＝重要文化財)＝本丸御殿復元工事のため保護板で覆われている。本来はこの位置から天守群がみえる。
 - (1)本丸大手門は簡単な2の門、升形、1の門渡櫓門で構成されていた。
 - ②本丸大手馬出し跡＝馬出しは虎口の守る設備をいう。大型角馬出し、最強の構え。
 - (1)西の丸側の空堀、石垣を欠落、時間許せば石垣にも登る
 - ③2の丸と大手馬出しを結ぶ土橋
 - ④加藤清正石曳きの像＝慶長15年加藤清正は徳川家康に願い出て大小の天守閣の石垣工事を担当した。清正は巨石を修羅に乗せて運ぶとき、石の上に乗る氣勢を上げたと伝えられ、世に「清正の石曳き」といわれている。
 - ⑤本丸東南隅櫓＝南西隅櫓とそっくり、よくみると出窓の破風にちょっぴり変化
 - ⑥2の丸御殿と能舞台(解説図面)＝城主が居住した書院造り御殿
現在地、玄関、表御殿、中奥御殿、奥御殿、台所、役所で構成
 - (1)元和6年義直が本丸から移って以来、廃藩置県までの歴代城主住居、藩庁舎とされた
 - (2)3代綱誠の20男宗春は、兄たちの死で7代藩主となるが、折しも「享保の改革」推進中の8代將軍吉宗を批判して「尾張バブル経済」を実現させるが、膨大な赤字を抱えて崩壊、蟄居謹慎、隠居を命じられた。墓に掛けられた金網は明治まで外されなかった
 - ⑦初代藩主義直の「軍書合鑑碑」＝前出参照
 - ⑧那古野城古碑(織田信長居城)＝前出参照
 - ⑨2の丸茶亭(金しゃち茶釜)＝大森会長担当
 - ⑩2の丸庭園(国名勝)＝2の丸御殿に付属した枯山水回遊式庭園、非常時の避難場所。
 - ⑪埋め門跡＝非常時脱出口(⑩以降を省略することがあります)
 - ⑫2の丸南蛮たたき土塀 ⑬水濠＝搦手、湿地、水濠を遠望

本丸、御深井丸＝保科講師担当
名古屋城を最後に東京めざして帰路に。

以上



バス駐車場



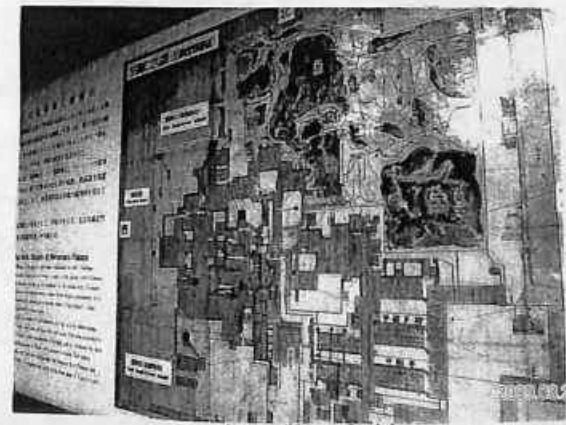
正門



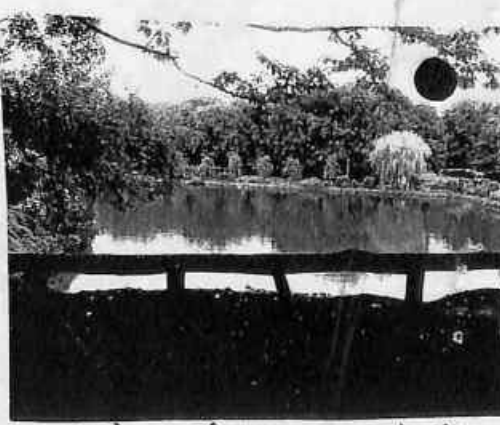
空堀



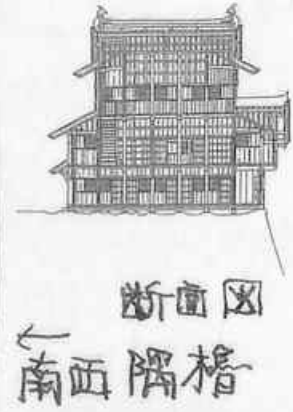
東南隅櫓



2の丸御殿



水濠と南蛮たたき狭間



断面図
南西隅櫓



側面図
本丸石垣



那古野城跡碑
←清正の石曳き



↓2の丸茶亭



2の丸庭園